

3章 海外実演団体運営状況調査

3章 海外実演団体運営状況調査

1. 概要

各国の実演団体を取り巻く環境は刻々と変化しており、日本のバレエ団も日々難しい経営判断を迫られている。世界のバレエ団や実演団体がどんな問題を抱えており、またいかに対応をしたのかは日本のバレエ団運営にとって大いに参考となるが、日本の国内バレエ団では海外バレエ団や実演団体の動向について調査を行い、情報を取りまとめる人力的、時間的な余裕はない。本事業は海外のバレエ団の動向を調査し、会員団体向けにレポートを発行することでそうした課題を解決し、日本におけるよりよいバレエ団運営に資することが狙いである。

<実施概要>

運営スタッフ向け「海外実演団体運営状況調査」

- ・レポート発行対象：日本バレエ団連盟会員団体（9団体）の運営スタッフ
- ・レポート発行時期：2021年5月～2022年3月（週に1回2,400字程度のレポートを発行）
- ・調査協力：昭和音楽大学バレエ研究所

2. 調査方法

- ・メディア記事の抜粋翻訳を中心にレポートを構成した。
- ・新聞記事等、インターネット上のメディア記事を中心に調査を行った。バレエ団や実演団体、また劇場の公式サイト、公式SNS等も確認した。
- ・英語メディアが中心であるが、その他言語のニュースについても調査した。
- ・著名メディアだけではなく、ローカル紙なども調査対象とした。バレエ団運営に関する話題は報道の機会が少なく、著名メディアのみでは限界があるためである。
- ・バレエ団運営の現場ですぐに活用できる記事や情報を中心にレポートを作成した。海外バレエ団や実演団体がいかにパンデミックをめぐる状況に対応しているのか、またバレエ団経営に関する情報は優先的に選択した。バレエ界を取り巻く社会的な動きに関する報道にも注視した。バレエやダンス以外の実演芸術、特にオペラやミュージカル等で、バレエ団運営に活用できそうな情報も選択した。
- ・新型コロナウイルスをめぐる状況は日々変化するため、新型コロナウイルスに関する情報に関しては、速報性を意識した。情報の確実性と速報性が相反する場合は、速報性を重視した。
- ・バレエをめぐる社会的な動きで注視すべきと思われる情報がある場合は、それも掲載した。

<情報収集を行ったウェブサイト>

新聞、テレビ、業界誌、ネットメディア等

ABC News

ABC 7 New York

BBC

Boston Business Journal

Broadway News

Classic FM

Click2Houston

Clydebank

CNBC

Dance Magazine

Danses avec la plume

Exeunt Magazine

Global News

Global Times

Griffith News

Guardian, The

Gramilano

Financial Times

France 24

Houston Chronicle

Houston Public Media

iNEWS

Limelight Magazine

Korean Herald, The

Korean Times, The

Mail Online

Marketplace

New York Times, The

NPR

Point Magazine

Reuters

RT

Sydney Morning Herald, The

Spectrum News

Stage, The

Stuff
 Swissinfo
 Time Out Hong Kong
 Variety
 Wall Street Journal
 Washington Post, The
 WHBL
 WWD
 Yonhap News 等

以上に加えて著名なバレエ団や劇場の公式サイトやSNS等でも調査を行った。

3. 発行レポート概要

(2022年1月28日時点)

発行日	トピックス
2021年 5月11日	<ul style="list-style-type: none"> ・アメリカン・バレエ・シアターが夏のツアーを発表 (米国・ニューヨーク) ・ニューヨーク・ブロードウェイの劇場が人数制限なしで9月に再開 (米国・ニューヨーク) ・ブロードウェイの劇場がポップアップイベントのために再開 (米国・ニューヨーク) ・ヒューストン・バレエ団が9月から始める新シーズンの予定を発表 (米国・ヒューストン) ・ヒューストン・バレエ団が1年ぶりに公演を再開 (米国・ヒューストン) ・いかにボストン・バレエ団がコロナ禍を生き抜き、また観客層を拡大したか (米国・ボストン) ・今年、サマーコースの予定を立てるのがどれだけ困難か (米国) ・ベイル国際ダンスフェスティバルが観客入りで2021年に開催を発表 (米国・コロラド) ・イングランドの劇場が5月17日に再開 (英国) ・コラム：劇場は生き残りのために戦わなければならないが、もっと深刻な戦いも待ち受けている (英国) ・コロナ禍後、バレエ界は「とてもとてもゆっくりだが、回復期にある」とダーシー・バッセルは言う (英国・ロンドン) ・劇場幹部らが「新型コロナウイルス証明書」導入を支持 (英国) ・ダニエル・バレンボイムが隔離期間を理由として公演を中止 (韓国) ・中国トップのバレエ団が中国共産党100周年を記念して7作品を上演 (中国)
5月18日	<ul style="list-style-type: none"> ・ミラノ・スカラ座で開催されるダンスやコンサート、オペラ公演 (2021年5月、6月) (イタリア・ミラノ) ・英首相：インド型変異株によって劇場の完全再開は遅れるかもしれない (英国) ・キッチンから舞台へ、英国ロイヤル・バレエ団のダンサーが劇場再開に向けて準備 (英国・ロンドン)

発行日	トピックス
2021年 5月25日	<ul style="list-style-type: none"> ・ミラノ・スカラ座のオペラ公演が新型コロナウイルスのため中止（イタリア・ミラノ） ・大規模なバレエコンクールはどのように再開されたのか（米国） ・ポリショイ劇場が2022年3月までに予定されていた海外ツアー全ての中止を発表。海外諸国がロシア製ワクチンを認めないことを理由に挙げる（ロシア・モスクワ）
6月1日	<ul style="list-style-type: none"> ・ロックダウンが長引き、オーストラリア・バレエ団は多額のチケット収入を失っている（オーストラリア・メルボルン） ・パンデミックの影響でバレエ団はダンサーを解雇し、支出削減のために移転を行っている（韓国）
6月8日	<ul style="list-style-type: none"> ・ワシントン・バレエがワシントンで初めて、パンデミック後のファンドレイジング・ガライベントを開催した（米国・ワシントン） ・もし6月21日に観客制限なしの劇場再開が許可されないならば、アンドリュー・ロイド＝ウェバーは英国政府に対して法的措置を取ることを検討している（英国）
6月15日	<ul style="list-style-type: none"> ・「今までで最も辛い規制緩和の延期だ」-規制緩和が延期されることとなり、劇場は経営面での打撃を受けている（英国・ロンドン） ・バレエがヴァーチャル・リアリティにも進出を果たした（米国・ボストン） ・アンドリュー・ロイド＝ウェバーは、6月21日に制限なしで劇場を再開するためには、逮捕もいとわないと述べた（英国・ロンドン）
6月22日	<ul style="list-style-type: none"> ・「やっとなって来た」：新型コロナウイルスや火事等の苦難を乗り越え、ジェイコブズ・ピロー・ダンス・フェスティバルが2021年に復活する（米国） ・クロエ・ロベス＝ゴメスが最近の裁判とインクルーシブなバレエ界への希望を語った（ドイツ・ベルリン） ・「白鳥の湖」のために白く塗ることを強要されたベルリン国立バレエ団の黒人ダンサーが、裁判で勝った（ドイツ・ベルリン） ・パリ・オペラ座バレエ団はバレエにおける人種問題に配慮することを求められている（フランス・パリ）
6月29日	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルスのクラスターが起き、ダンサーに隔離の必要があるため、英国ロイヤル・バレエ団が数公演を中止（英国・ロンドン） ・英国新保健大臣によれば、劇場の観客制限なし再開は7月19日の見込み（英国・ロンドン） ・ニューヨークのブロードウェイが再開（米国・ニューヨーク） ・「スプリングスティーン・オン・ブロードウェイ」：パンデミック以来、初めての観客制限なしの公演が開催された（米国・ニューヨーク）
7月6日	<ul style="list-style-type: none"> ・英首相：新型コロナウイルスによる観客制限を7月19日に撤廃（英国） ・新型コロナウイルスの終息が見え始め、韓国の劇場や実演芸術界は「リベンジ消費」で活気づいている（韓国）
7月13日	<ul style="list-style-type: none"> ・7月19日以降も劇場ではマスク着用やその他の感染防止対策を継続する予定（英国） ・さらに厳しいソーシャルディスタンス等が求められる中、劇場は開演日時変更等で対応を行っている（韓国・ソウル） ・ロンドン・サウスパークにある5つの劇場の閉鎖は、約330百万英国ポンドの経済的損失となった（英国）
7月20日	<ul style="list-style-type: none"> ・バレエダンサーがオーストラリアンフットボールを見ながら学んだこと（オーストラリア）

発行日	トピックス
2021年 7月27日	<ul style="list-style-type: none"> ・ミラノ・スカラ座ドミニク・マイヤー総裁インタビュー：ワクチンパスポートと開かれた劇場について（イタリア・ミラノ） ・英国政府調査：コロナ禍で起きたイノベーションによって英国の文化セクターが大きく変わる可能性がある（英国）
8月3日	<ul style="list-style-type: none"> ・脳に損傷がある人へ向けたバレエプログラムが実験的に実施される（オーストラリア・ブリスベン） ・米国を代表するバレエ団がコロナ禍後、初めて大規模な観客の前で公演を行う予定（米国・ニューヨーク） ・2021年度の予算：映画産業や芸術団体向けの助成金は大幅な増額だったが、アーティストの給与は変わらず（ニュージーランド）
8月10日	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェストエンドで上演中の3作品が新型コロナウイルス隔離措置の影響で公演中止（英国・ロンドン） ・観客は観劇に対する安心感がより高まったという調査結果（英国）
8月24日	<ul style="list-style-type: none"> ・オーストラリア・バレエ団がメルボルン公演を中止（オーストラリア・メルボルン） ・ブロードウェイの新型コロナウイルス専門家、安全な劇場再開について語る（米国・ニューヨーク）
8月31日	<ul style="list-style-type: none"> ・ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーが冬にソーシャルディスタンス公演を開催（英国） ・スコットランド政府が公演開催における新たな規制を導入し、劇場業界が混乱（英国・スコットランド）
9月7日	<ul style="list-style-type: none"> ・スマートなパーティー、伝統あるサロン文化が復活を遂げている（米国・ニューヨーク） ・サムスンが中環のビルをデジタル劇場に変身させた（香港）
9月14日	<ul style="list-style-type: none"> ・『くるみ割り人形』公演再開にあたり子どもには新ルール（米国・ニューヨーク）
9月21日	<ul style="list-style-type: none"> ・ブロードウェイ最大規模の3作品が感染防止対策の下で公演再開（米国・ニューヨーク） ・音楽フェスティバルと新型コロナウイルス：リスクを取る価値はあるのか？（英国） ・トランスセクシュアルの生徒のためにダンス学校が服装規定の緩和を予定（英国）
9月28日	<ul style="list-style-type: none"> ・パリ・オペラ座バレエ団がオープニングガラ公演を開催（フランス・パリ） ・パンデミック後、ニューヨーク・シティ・バレエが公演再開（米国・ニューヨーク） ・希望を持って（そしてイアン・マッケランのために）英国に渡航したが、リスクに見合う価値はあったのか？（英国）
10月5日	<ul style="list-style-type: none"> ・英国トップのバレエダンサーらが舞台に復帰（英国・ロンドン） ・カーネギーホールが再開間近（米国・ニューヨーク） ・英政府がワクチンパスポート導入を検討（英国）
10月12日	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍においてオンラインでストーリーミング公演を開催した劇場の50%が、現在は劇場での観客入り公演のみを開催している（英国） ・『くるみ割り人形』が新型コロナウイルス感染防止ガイドラインと共にトロントに戻ってくる。しかしセレブの観客や子役はなし（カナダ・トロント）
10月19日	<ul style="list-style-type: none"> ・イタリアの劇場が観客収容率100%に戻る（イタリア） ・大学のダンス学部は新型コロナウイルスによって何が変わったのか（米国）
10月26日	<ul style="list-style-type: none"> ・ブロードウェイ『オペラ座の怪人』が感染予防対策の上で公演再開（米国・ニューヨーク） ・モスクワは2020年6月以来のロックダウンをふたたび行う（ロシア・モスクワ）

発行日	トピックス
2021年 11月2日	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育におけるダンスの未来が危ぶまれている。規模縮小を示唆する調査結果が発表された（英国） ・オーストラリア・バレエ団が2022年シーズンのスケジュールを発表（オーストラリア）
11月9日	<ul style="list-style-type: none"> ・パンデミックはダンスカンパニーにとってとどめの一撃だった（米国）
11月16日	<ul style="list-style-type: none"> ・劇場界の人手不足（英国）
11月30日	<ul style="list-style-type: none"> ・英国ロイヤル・バレエ団が『くるみ割り人形』のアラビアの踊りを改訂。プロダクションをインクルーシブなものにするため（英国） ・口紅を共有しないで！バレエ団がどうやってコロナ感染を避けた公演を上演しているのか（米国）
12月7日	<ul style="list-style-type: none"> ・この冬の新型コロナウイルスによる行動制限は、芸術界にどんな影響があるのか（英国） ・新型コロナウイルスの影響で中止されたバレエ公演がストリーミングで上演される（ニュージーランド） ・新型コロナウイルスに関連した輸送遅延で、ヒューストン・バレエ団の『蝶々夫人』公演が延期（米国・ヒューストン）
12月14日	<ul style="list-style-type: none"> ・ミラノ・スカラ座バレエ団シーズン初日がクラスター発生で延期に（イタリア・ミラノ） ・最も有名なバレエ作品でアジア人の描かれ方が変わる（米国）
12月21日	<ul style="list-style-type: none"> ・英国ロイヤル・バレエ団が『くるみ割り人形』公演を中止（英国・ロンドン） ・新型コロナウイルス感染のためレ・グラン・バレエ・カナディアンが『くるみ割り人形』公演を中止（カナダ・モントリオール） ・メトロポリタン歌劇場がスタッフと観客全員にブースター接種を義務付け（米国・ニューヨーク）
2022年 1月11日	<ul style="list-style-type: none"> ・ニューヨーク・シティ・バレエ団が冬シーズン開始を延期（米国・ニューヨーク） ・「ロベルト・ボッセと仲間たち」公演が新型コロナウイルスにより延期（イタリア、アラブ首長国連邦） ・オミクロン株による新規感染者急増に伴いロイヤル・アルバート・ホールは『くるみ割り人形』公演を2022年まで延期（英国） ・大混乱：新規感染者急増でコンサートやミュージカル、演劇などが公演中止に（英国）
1月18日	<ul style="list-style-type: none"> ・モーリス・ベジャール・バレエ団が新型コロナウイルスを理由として公演を延期（アンドラ） ・ナショナル・シアターは売り上げ、職員数共に激減（英国・ロンドン） ・ジョフリー・バレエが新型コロナウイルスの影響で公演延期（米国・シカゴ） ・「危機的状況」：劇場幹部らはオミクロン株感染拡大を理由とした収入減に悩まされている（英国）
1月25日	<ul style="list-style-type: none"> ・ロイヤル・バレエ学校がダンス教育の未来を変える計画を発表（英国） ・まだ男性がバレエを支配しているのか？統計をとってみよう（米国）

※ 2022年2月1日、8日、15日、22日、3月1日、8日、15日、22日、29日にも発行予定

<海外実演団体運営対応状況概要>

以下はすでに発行した「海外実演団体運営対応状況調査」の概要である。2021年5月から月ごとにまとめ、その月の概観を述べたのち、地域ごと（欧州とロシア、英国、北米、その他の地域）の動向について記載した。

本調査はインターネット等ですでに発表されている記事を元に構成されている。よって実際に公演や事件等が発生した時点から、インターネット上で記事となり、またその後、本調査の対象となるまでに時間差がある。本報告書はあくまで「海外実演団体運営対応状況調査」の概要であるため、例えば実際の出来事が6月に起きたとしても、「海外実演団体運営対応状況調査」では7月に取り上げた場合、7月の内容として処理をしている。

2021年5月

概観：2020年より世界各地では劇場閉鎖が続いていたが、しかしいくつかの地域では、条件つきではあるが公演の再開も始まった。米国のニューヨークや他の地域では、試験的に屋外公演が再開された。また国によってはワクチン接種も進んでいる。通称「ワクチンパスポート」の導入に関しては英国社会でも賛成反対ともに様々な意見があるが、劇場幹部らは劇場再開に向けて支持を表明した。ロシア製ワクチンがロシア国外では承認されていないため、ボリショイ劇場が海外ツアーを中止した。韓国からは2週間の隔離措置が障害となって、海外アーティストの招聘公演が開催できない、といった報道もあった。中国では中国国立バレエ団によって屋内の公演も開催された。同時に英国等では新型コロナウイルス変異種と、その劇場再開への影響についての報道も始まった。

欧州・ロシア

イタリアのミラノ・スカラ座では観客を入れたコンサートやバレエ公演が5月から6月にわたって開催される。5月はオーケストラ団員の間でもソーシャルディスタンスを保つため、1階客席にオーケストラが入っているが、6月からはそれもなく、1階客席にも観客が座る予定である。しかし5月後半には、スカラ座のオペラ公演が、団員の感染が明らかとなったため、中止された。

ロシアのボリショイ劇場は2022年3月まで、予定されていた海外ツアーすべてを中止すると発表した。ロシア国外ではロシア製ワクチンが承認されておらず、ロシア製ワクチンを接種した人の入国が難しいことが理由である。

英国

(元英国ロイヤル・バレエ団プリンシパル) ダーシー・バッセルは「英国のバレエ界はコロナ禍が与えたダメージから、ゆっくりではあるが立ち直りつつあるのではないかとインタビューで述べた。しかしながら、バレエにはダンサーやバレエ団だけでなく照明や衣装デザイナーなども関わっており、コロナ禍の打撃は大規模にわたるた

め、以前の状況に戻るにはかなり時間がかかるだろうとも述べている。

また英国ではワクチン接種や抗体証明、また新型コロナウイルスの検査で陰性であったことを証明する「ワクチンパスポート」導入について検討が始まった。排他的であるとの理由で反対意見もあるが、ロイヤル・オペラ・ハウスを含む劇場の幹部らは導入に対して支持を表明した。

5月はじめには、英国・イングランドでは5月17日より劇場再開が許可されるとの報道があった。屋内は劇場の定員の50%または1000名以下、屋外では定員の50%または4000名以下で、また観客はソーシャルディスタンスを保つ必要がある。ロイヤル・オペラ・ハウスでも5月17日に公演再開が見込まれると報じられた。

しかし5月中盤になると、英国ではインド型変異種の感染拡大が報じられ、また劇場再開への影響に関する報道も始まった。6月には観客制限なしの劇場再開も可能だと思われていたが、それが変異種の感染拡大によって遅れるのではないかという議論がなされた。

業界紙であるThe Stage紙は、劇場再開を目前として、コロナ禍が産業全体に与えた影響について論じている。実演団体ではフリーランサーが多く働いているが、劇場や芸術団体はコロナ禍でそうした人々を救済しようとしなかったため、劇場や芸術団体とフリーランサーの間には深い不信感が生まれてしまった。またコロナ禍を機として業界を離れた人も多くいる。こうした問題は劇場が再開したからといって一夜で解決できるものではなく、コロナ禍の影響は今後何年も続くだろうという内容だ。

北米

ニューヨーク・ブロードウェイでは2020年より劇場が閉鎖されていたが、2021年3月になって初めて、屋外の劇場で試験的に公演が再開された。観客は150名ほどで、マスク着用は必須であり、ソーシャルディスタンスを保つことも条件である。また観客らは72時間以内に受けた新型コロナウイルスの検査で陰性であった証明か、またはワクチン接種の証明を提示する必要がある。

2020年には中止だったバイル国際ダンスフェスティバルが、2021年には開催されることが発表された。本フェスティバルはコロラド州で7月から8月にわたって開催され、ニューヨーク・シティ・バレエ団団員を含め、全米から数多くのダンサーが参加する予定である。

ボストンビジネスジャーナル紙によると、ボストン・バレエ団はボストンにある実演団体の中でも、うまくコロナ禍を切り抜けた団体であるという。『くるみ割り人形』公演のテレビ放送や有料ストリーミングサービスを活用し、顧客層の拡大に成功したからだ。またバレエ学校もデジタルと実際のレッスンを交えたハイブリッドの形式を採用し、比較的早期に再開を果たした。これによってバレエ団はレッスン料収入を得ることができた。

ヒューストン・バレエ団も野外で1年ぶりに公演を再開した。

米国でも最も著名なバレエ団のひとつであるアメリカン・バレエ・シアターは、2021年夏に大規模な全米ツアーを行うことを発表した。会場はすべて屋外の仮設スタジオであり、バレエ団は大型トラックに仮設スタジオを積載し、移動してツアーを行う。アメリカン・バレエ・シアターはカリフォルニアで4月に屋外公演を行っており、またこれ以外にも野外公演の予定がある。

ヒューストン・バレエ団は9月から始まる2021-2022シーズンの発表を行った。ヒューストン・バレエ団はコロナ禍において積極的にデジタルでの取り組みを行ってきたが、9月からそのデジタルでの活動を継続する予定だ。

ニューヨークのブロードウェイは9月より、観客の人数制限を撤廃し、劇場再開をする予定であると発表された。ブロードウェイの劇場は2020年3月より閉鎖が続いている。

その他の地域

韓国では海外からの渡航者が2週間の隔離期間が義務づけられているが、それを理由として海外アーティストの公演中止が相次いでいる。ダニエル・バレンボイムは5月にソウルで韓国初のピアノリサイタルを行う予定だったが、2週間の隔離期間が免除されないことが理由となって、公演が中止された。また韓国国立バレエ団にマリインスキー・バレエ団のキミン・キムとオリガ・スミルノワが客演する予定だったが、やはり同じ理由で中止となった。

中国国立バレエ団は中国共産党100年を記念し、北京天橋芸術院において公演を開催した。7つのオリジナル作品を上演した。

2021年6月

概観：米国ではワクチン接種が進み、ブロードウェイでは15ヶ月ぶりに観客制限のない公演が開催された。それと同時にコロナ禍がバレエ団経営へ与えた影響も、徐々に明らかになりつつある。オーストラリア・バレエ団はチケット収入が激減したことから、様々な対応を行うことを余儀なくされた。韓国のバレエ団も運営面で苦境に立たされている。英国では政府より観客制限のない公演再開が当初の6月21日から7月19日へ延期になると発表されたが、劇場幹部らからは政府の判断に大きな批判が集まった。またバレエ界における人種問題に関する報道もあった。ドイツのベルリン国立バレエ団に対して人種と契約解除をめぐる裁判が行われ、両者は和解した。パリ・オペラ座バレエ団も人種問題について配慮することを求められている。

欧州・ロシア

ブラック・ライヴス・マターを契機として人種に関する問題が議論されることが多くなったが、フランス人ダンサーのクロエ・ロペス＝ゴメス氏は契約解除をめぐるドイツのベルリン国立バレエ団に対して裁判を行い、2020年4月にバレエ団側と和解していたことが明らかとなった。ロペス＝ゴメス氏は人種をめぐるバレエミストレス

から嫌がらせを受けていたという。

またニューヨーク・タイムズ紙によれば、パリ・オペラ座バレエ団も同様に、人種問題について配慮することが求められている。2020年、バレエ団の黒人ダンサー5名がパリ・オペラ座に向けて改善を求めて書簡を送り、今年になってオペラ座側は多様性に配慮するために対応を行うと回答した。

英国

英国では変異種の感染が拡大しているため、6月21日に許可されるはずだった観客制限なしの劇場再開が、当初より4週間延期されることとなった。これに対し、観客制限のない再開を待ち望んでいた劇場関係者からは大きな反発があった。6月下旬になって、劇場の観客制限なし再開は7月19日となることが発表された。

しかし6月下旬には英国ロイヤル・バレエ団内で集団感染が発生し、予定されていた公演が中止となった。

北米

ワシントン・バレエ団はファンレイジング・ガライベントを開催した。2020年もコロナ禍の中でガライベントを開催したが、その後、新型コロナウイルス感染者がバレエ団から数名発見された。今年のカライベントでは感染防止対策を厳重に行い、安全に開催することができた。

米国でのワクチン接種が進んだ結果、ニューヨーク・ブロードウェイでは規制緩和に伴い、6月29日より15ヶ月ぶりに観客制限のない公演が再開された。しかし多くのプロダクションは9月に再開予定である。

その他の地域

シドニー・モーニング・ヘラルド紙によると、昨年から継続する新型コロナウイルスの影響でオーストラリア・バレエ団はチケット収入を失い、経営面で苦境に立たされている。2019年には34百万オーストラリアドルのチケット収入があったが、2020年にはそれが2百万ドルまで減った。オーストラリア・バレエ団はバレエ団維持のために様々な取り組みを行っている。

また韓国においても、新型コロナウイルスの影響でバレエ団は様々な問題を抱えている。ユニバーサル・バレエ団は75名いたダンサーのうち25名を解雇し、ソウル・バレエ・シアターもダンサー数を大きく減らすことを余儀なくされた。ワイズ・バレエ・シアターやセオ・バレエ・カンパニーも本拠地の移転を迫られた。

2021年7月

概観：観客制限なしの屋内公演が英国でも始まった。英国政府は観客のマスク着用を義務付けないが、しかし業界団体は観客へマスク着用を強く推奨するとしている。また英国では長く続いた劇場閉鎖の、英国経済への影響に関する調査も行われ、莫大な影響があったことが明らかになった。コロナ禍で舞台芸術に導入されたデジタルテクノロジーに関しては、コロナ禍が終わっても舞台芸術に影響を与え続けるだろうと見られている。オーストラリアでも、舞台芸術におけるデジタルテクノロジーについて公開討論が行われ、デジタルテクノロジーをいかに今日の観客に合わせたかたちで活用するのか等について意見交換があった。韓国からは「リベンジ消費」により、観劇チケットの販売が好調であるとの報道もあった。

欧州・ロシア

ミラノ・スカラ座ドミニク・マイヤー総裁はインタビューで、グリーンパス（ワクチンパスポート）の導入支持を表明した。

英国

英国・イングランドでは7月19日に劇場の観客制限が撤廃され、100%の定員で公演が開催できることとなった。観客にマスク着用は義務付けられない。同時に劇場関係者からは、公演中止になった場合の補償制度を求める声が上がった。もし感染者が出た場合、濃厚接触者も自宅隔離の必要があるため、公演を中止しなければなくなるからだ。またソサエティー・オブ・ロンドン・シアターやUKシアターといった業界団体は、観客へのマスク着用への強い推奨を含め、感染防止対策を引き続き行うと発表した。

劇場閉鎖が与える経済的損失について新たな調査報告書が発表され、ロンドン・サウスバンクにある5つの劇場閉鎖がこうむった損失は約330百万ポンドに上ると試算された。同報告書はまた、8名中7名の劇場スタッフが一時解雇となったとも述べている。

英国政府は別の調査報告を発表し、そこではコロナ禍においていかに実演団体がデジタル技術を活用し、様々な取り組みを行ったかを紹介した。コロナ禍で芸術界に導入されたデジタルテクノロジーは、今後も英国の文化産業に大きな影響を与え続けるだろうと論じている。

その他の地域

ここ数ヶ月、韓国の実演芸術界はリベンジ消費で活気づいている。コロナ禍で抑圧されていた消費者の購買意欲が、今になって活性化しているのだ。例えば4月にソウルで公演が開始したミュージカル『シカゴ』は、70公演がチケット完売だった。こうした消費活動は今後数ヶ月か続くだろうと予想されている。

オーストラリア・カウンシル・フォー・ジ・アーツはオンライン討論会を開催し、コ

コロナ禍で進むデジタル公演等について関係者で話しあう機会を設けた。討論会では、観客はデジタル公演では劇場での観劇と同額を支払うことにためらいがある、との指摘がなされた。オーストラリア・バレエ団はデジタル公演にスポーツ中継の手法を採用しており、ダンサーのウォーミングアップ等の舞台裏映像を放送したり、公演中に解説を入れるなどの取り組みを行っているという。

2021年8月

概観：アメリカン・バレエ・シアターは10月に屋内での公演を再開すると発表した。英国では観客制限のない公演が始まったが、出演者が新型コロナウイルスに感染した等の理由で、ウェストエンドの3作品が上演中止を迫られた。また劇場再開直後に調査をしたところ、ソーシャルディスタンスを保った公演のほうが観客の安心感が高かったという調査結果が発表された。オーストラリア・バレエ団は反対に、変異型ウイルス蔓延によって、2021年に開催予定だった44公演を中止とすると発表した。

英国

ロンドン・ウェストエンドでは3作品が新型コロナウイルスの影響で上演中止となった。英国政府からは上演が中止となった場合の補償制度が発表されていたが、これらの公演に本補償制度が適用されない。劇場関係者らは制度の不備を指摘している。イングランドでは、規制緩和直後に観劇前後で観客の安心感を調査したところ、観劇後に安心できると答えた観客の割合が22%増加した。それと同時に、ソーシャルディスタンスを維持した公演のほうが、満席の公演よりも、観客が安心と感じるという結果も発表された。この調査では、ソーシャルディスタンスを維持した公演には需要があるため、公演の一部、または座席の一部でソーシャルディスタンスを保つ仕様にしたらどうかという提案をしている。

ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーは屋外のみで公演を開催しているが、11月と12月にソーシャルディスタンス公演を開催すると発表した。ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーは10月に屋内での公演を再開する予定だが、顧客らから、満席の劇場で観劇することに不安を訴えられたからだという。

またスコットランドでは、舞台上の演者同士が1メートル以上近づく場合はマスクを着用しなければならないという新たな感染防止規制が導入され、現場で大きな混乱が広がった。

北米

アメリカン・バレエ・シアターは10月にニューヨーク・リンカーンセンターで大規模な屋内公演を開催すると発表した。最後に屋内で公演を行ってから1年以上が経過している。アメリカン・バレエ・シアターは夏に全米ツアーを開催しており、そのツアーで得た感染防止のノウハウを10月の公演でも活用すると言う。

その他の地域

ニュージーランドでは2021年度、文化芸術への政府助成金が大幅に増額されたが、アーティストへの給与支払い額は依然として低いままと言う。

オーストラリア・バレエ団は変異型の蔓延によって公演開催の可否が不透明な状況であり、かつロックダウンと行動規制が敷かれたことを理由に、メルボルンでの44公演を延期すると発表した。中止となる可能性や、観客制限がある公演への準備に資金や時間を使うのは難しく、それよりも資金を温存して、ダンサーやバレエ団スタッフの雇用を維持したいと、経営陣が判断したためだ。

2021年9月

概観：いくつかの地域からは本格的な公演再開のニュースがあった。パリ・オペラ座バレエ団やニューヨーク・シティ・バレエ団はシーズン開始を飾るオープニングガラ公演を開催した。ブロードウェイでも『ライオンキング』といった大規模なミュージカル作品が、1年半ぶりに上演された。また米国のバレエ団は年末に『くるみ割り人形』を安全に上演するため、バレエ団ごとに様々な方法を考えている。ニューヨーク・シティ・バレエ団はワクチン接種が認められていない11歳以下の子役は、2021年の『くるみ割り人形』に出演しないと発表した。

欧州・ロシア

パリ・オペラ座バレエ団がシーズン開始を飾るオープニングガラ公演を開催した。オープニングガラ公演はバレエ団前芸術監督のバンジャマン・ミルピエ氏が始めたもので、観客の大半はスポンサーである。

英国

英国では夏に大規模な音楽フェスティバルが開催されたが、そこで新型コロナウイルスの爆発的な感染拡大があったと考えられている。感染した参加者のひとは、感染してまで参加する価値はなかったのではないかと述べている。

またニューヨーク・タイムズ紙は、演劇鑑賞のために米国からロンドンに渡航し、新型コロナウイルス検査で陽性となったジャーナリストの体験を紹介している。同紙は、ロンドンの劇場では観客がワクチン接種証明の提示を義務づけられておらず、また多くの観客がマスクを着用していなかったと報じた。

北米

ニューヨークでは文化の最先端としてサロンが流行の兆しを見せている。サロンでは様々な人が集い、参加者全員は議題についてなにか発言することが求められる。例えばニューヨーク・ソーホーで開催されたサロンでは、アメリカン・バレエ・シアターのジェームス・ホワイトサイドとオスカーデラレンタのローラ・キムが中心になって、いかに芸術文化やファッション産業がパンデミックと共に変化しなければならないか

について議論が行われた。

米国の多くのバレエ団にとって、『くるみ割り人形』の上演はバレエ団運営において非常に重要だ。なぜなら『くるみ割り人形』のチケット収入がバレエ団年間収入の半分近くを占めているからだ。子役の出演が多く、また子供が多く鑑賞する『くるみ割り人形』上演に関して、米国のバレエ団はいかに感染防止をしながら安全に上演できるかについて、試行錯誤を重ねている。ニューヨーク・シティ・バレエ団は毎年恒例『くるみ割り人形』の上演において、11歳以下の子供を出演させないことを発表した。11歳以下の子供はワクチンを接種することができないためである。また11歳以下の子供は新型コロナウイルスの検査で陰性であった証明を提示すれば、『くるみ割り人形』を鑑賞することができる。

ニューヨーク・ブロードウェイでは、最も規模の大きい3作品である『ライオンキング』、『ハミルトン』、『ウィキッド』が9月14日に上演を再開した。令和2年3月に上演を中止してから1年半近くが経過している。こうした公演再開は突然にではなく、様子を観ながら、徐々に始まるだろうと関係者は述べている。

またニューヨーク・シティ・バレエ団もデイヴィッド・H・コーク劇場で1年半ぶりに公演を再開した。2,500席ある劇場は満席であり、カーテンコールは15回繰り返された。

その他の地域

サムスン香港・中環でビルのファサードにLEDの曲面スクリーンを設置し、香港バレエの『不思議の国のアリス』の一部を放映した。劇場芸術と最新テクノロジーが融合した例のひとつである。

2021年10月

概観：多くの地域で公演を本格的に再開した劇場やバレエ団が増えた。今後、継続的に劇場で観客入りの公演を安全に開催するため、各国政府や関連団体らは「ワクチンパスポート」について検討を開始し、導入を始めた地域もあった。「パンデミック後」という文脈で現状を語る記事も増えた。しかしロシア・モスクワでは2度目のロックダウンも始まった。

欧州・ロシア

イタリアの劇場が10月11日より観客制限なしの公演を開催した。観客らはマスク着用と、グリーンパス（ワクチン接種等の証明）の提示が求められた。

モスクワでは新規感染者急増を受けて、2020年6月以来2度目のロックダウンが行われた。劇場は閉鎖を求められなかったが、しかし観客数は制限され、また劇場における観客のマスク着用は義務付けられた。

英国

英国ロイヤル・バレエ団は10月5日に、ロイヤル・オペラ・ハウスで公演再開を果

たした。

英国政府は劇場の入場にあたって、ワクチンパスポートの導入を検討している。PCR検査等の陰性証明は含まれず、ワクチンを2回接種した証明のみが対象となる。

英国において行われた調査によれば、コロナ禍でオンライン公演を実施した劇場のうち半分が、今後オンライン公演を開催する予定がないことがわかった。オンライン公演は劇場に行くことができない人々にとってメリットがあった。劇場側は、オンライン公演は上演にあたって経費が必要だが、採算が取れるか不明であるため、恒常的な上演に関して経営的な面で動機づけに欠けるとしている。

北米

ニューヨーク・カーネギーホールは19カ月ぶりに、10月6日から観客入りコンサートを再開する。コロナ禍においてチケット収入がなかったため、カーネギーホールは10百万ドルの赤字を抱えている。また大幅な人員削減を避けられなかった。換気等、感染防止対策を万全にして、新シーズンを始めるという。

カナダ国立バレエ団は12月に『くるみ割り人形』公演を開催することを発表した。しかし感染拡大防止の観点から子役は出演せず、また有名人のゲスト等も招待されないこととなった。

米国の大学に設置されているダンス学部では、パンデミックが起きてから、状況に対応するために様々な取り組みを行ってきた。コロナ禍でZOOMのレッスンを導入した大学も多いが、そのうちいくつかは、通常に戻ってもZOOMレッスンを継続する予定だという。また公演ができない代わりに、映像向け作品の創作を行うなどの取り組みを行った大学もあった。パンデミックという困難を乗り越えたことで、自信も生まれたと関係者は言う。

またブロードウェイでは『オペラ座の怪人』といった大規模な作品が、公演を再開した。

2021年11月

概観：各地からはパンデミックが劇場界に与えた長期的な影響についての報道があった。英国では本格的に公演が再開したが、劇場界は人手不足で、募集をかけてもなかなか人材が集まらない。コロナ禍中に解雇した人材は他業界ですでに働き始めており、従来の劇場界の労働条件では、そういった人材を呼び戻すことができないためだ。米国ではコロナ禍で解散となったダンスカンパニーがいくつもあることが明らかとなった。また米国のバレエ団は『くるみ割り人形』の安全な上演のため、様々な工夫をこらしている。英国では『くるみ割り人形』の上演にあたって、アラビアや中国の踊りに変更を加えるバレエ団がある。

英国

公演が本格的に再開され、英国の劇場界は人手不足に悩まされている。ステージマ

ネージャー、照明デザイナー、プロデューサーなど、他の業界に転職可能なスキルを持ったスタッフが特に不足している状況だ。劇場閉鎖の際に解雇したスタッフは、すでに別の業界や職種に転職を済ませており、呼び戻すにあたっては給料が低く、うまくいかない。このままでは経験不足のスタッフが中心で公演を行わなければならない、上演の安全性にも問題が出るのではないかと指摘する声もある。状況の改善にあたっては、賃金や労働条件の向上が必要になるのではないかという意見もあった。

英国においては、パンデミック以前から懸念されていた学校におけるダンス教育の規模が、パンデミック渦中でさらに縮小の傾向にあるという調査結果が報告された。学校教育において占めるダンスの時間やダンス教師数が減ったという。

英国ロイヤル・バレエ団が『くるみ割り人形』におけるアラビアの踊りに変更を加えることを発表した。以前のものはハーレムを思わせ、不快な印象を与えかねないことが理由である。スコティッシュバレエ団も中国とアラビアの踊りに変更を加えることを発表している。

北米

新型コロナウイルスが米国のダンスカンパニーやバレエ団に与えた経営的打撃が明らかになり始めている。ポール・テイラーダンスカンパニーのツアー部門であったテイラー2をはじめ、いくつかのダンスカンパニーがすでに閉鎖を決めた。コロナ禍においては、本拠地のあるダンスカンパニーのほうが、建物の維持費がかかるぶん、経営が難しくなる傾向にあるという。従来、コンテンポラリー・ダンスのカンパニーでは、振付家の下で数人のダンサーが給料ベースで雇用されており、安定した契約のもとで働くのが一般的であった。しかしコロナ禍によってその状況が変わり、プロジェクトベースでの働き方が主流になる可能性もあると指摘されている。

また米国のバレエ団にとっては、いかに年末の『くるみ割り人形』を安全に上演するかが大きな課題である。本作品は出演者の数が多く、また子役も主演するため、通常の公演以上にバレエ団は様々な配慮をしなければならない。あるバレエ団は12歳以下の子役の出演を取りやめ、またあるバレエ団は子役の出演は認めるが、そのかわりに衣装の一部としてマスクの着用を求めるという。またオーケストラを感染から守るために、劇場最前列の2列を封鎖したバレエ団もある。

その他の地域

オーストラリア・バレエ団が2022年のスケジュールを発表した。昨シーズンは多くの公演で休演が相次いだため、2022年シーズンに持ち越される演目がいくつもある。またオーストラリアじゅうのバレエ団やコンテンポラリーダンスカンパニーらが一堂に会する『Dance X』と呼ばれるガラ公演も、2021年から2022年シーズンに持ち越しとなった。

2021年12月

総評：欧州や北米ではオミクロン株の感染が急速に拡大し、公演中止のニュースが相次いだ。ミラノ・スカラ座バレエ団、パリ・オペラ座バレエ団、英国ロイヤル・バレエ団等、名だたるバレエ団が公演中止を余儀なくされた。また新型コロナウイルスは海上輸送にも影響を与えており、舞台セットや衣装が輸送遅延で予定通り届かなかった結果、公演を延期したバレエ団もあった。北米で始まった「イエローフェイスにさよなら (Farewell to Yellowface)」運動が広まりを見せている。バレエ作品におけるアジア系のステレオタイプの表現に変更を求める運動である。

欧州・ロシア

ミラノ・スカラ座バレエ団内で集団感染が起き、『ラ・バヤデール』初日の公演が延期となった。新型コロナウイルスの検査で陽性と確認されたダンサーやスタッフ数は14名であり、療養となるほか、彼らと接触した人々は自宅待機となるため、リハーサルを行うことができなかつたためだ。記事はまたバレエ団内にはワクチン未接種の人々と、すでに接種をした人々との対立があるのではないかと述べている。パリ・オペラ座バレエ団は、バレエ団関係者に新型コロナウイルス検査で陽性が確認されたため、12月14日に予定されていた『ドン・キホーテ』公演を中止した。

英国

英国政府は劇場等の場所でのマスク着用を勧告しており、観客にマスク着用を義務づける劇場や芸術団体も現れはじめた。オミクロン株による感染拡大を懸念しての判断である。12月3日にロイヤル・オペラ・ハウスで予定されていたオペラ『トスカ』公演は、感染者増加を受けて5日に延期となった。また12月21日から1月3日に予定されていたロイヤル・バレエ団による『くるみ割り人形』公演は、オミクロン株の感染拡大による人員不足で中止となった。

北米

海上輸送に遅延が見られ、それがバレエ公演にも影響を与えている。ヒューストン・バレエ団はバレエ『蝶々夫人』を2022年3月に上演予定だったが、オーストラリアから舞台美術と衣装が予定通り届かないため、6月に延期することを発表した。こうした輸送遅延は世界的な問題であり、新型コロナウイルスによる労働力不足、コンテナ不足、港湾の混雑など、様々な要因が関係している。米国を中心に、バレエにおけるアジア系のステレオタイプな描き方に疑問を呈する「イエローフェイスにさよなら (Farewell to Yellowface)」運動が広がりを見せている。『くるみ割り人形』における中国の踊り等には時代遅れでステレオタイプの表現が多

く、運動はそういった表現の刷新を求めている。世界のいくつかの地域では、コロナ禍でアジア系への暴力事件が増加しており、そうしたことも契機となった。

カナダ・モントリオールを拠点とするレ・グラン・バレエ・カナディアンは12月17日から19日までの『くるみ割り人形』公演を中止した。モントリオールにおける、またバレエ団内におけるオミクロン株感染拡大が理由である。

ニューヨークのメトロポリタン歌劇場は、スタッフと観客全員に、ワクチンのブースター接種を義務付けることを発表した。

その他の地域

ニュージーランドではバレエ団公演が中止となり、公演はオンラインでストリーミング上演されている。ニュージーランドでは感染が拡大し、劇場内では観客がソーシャルディスタンスを保つことを義務付けられたが、その状態でバレエ公演を開催しても経営的に成り立たないと劇場が判断したためである。

2022年1月

概観：オミクロン株による新規感染者急増により、多くの地域で公演中止の報道があった。英国ではバレエだけではなく、ミュージカルやライブ等でも数多くの公演が中止となった。米国からは、バレエ界のジェンダー格差を、データを用いて明らかにした調査結果が発表された。

欧州・ロシア

モーリス・ベジャール・バレエ団は、バレエ団内で集団感染が起きたため、1月末のアンドラでの公演を延期することを発表した。

英国

ロンドンのロイヤル・アルバート・ホールは、バーミンガム・ロイヤル・バレエ団と提携して、12月末に開催予定だった『くるみ割り人形』公演を中止することを発表した。オミクロン株による新規感染者数が急増したためである。

また英国のライブ音楽業界では、オミクロン株による新規感染者数が増加したため、12月後半に70%以上の公演が中止となることを余儀なくされた。オペラやバレエ、またミュージカル公演でも中止が相次いでいる。ロンドンだけではなく、マンチェスターやエディンバラでも公演中止が続いた。

こうした公演中止を受けて、芸術団体や劇場は収入減に悩まされており、関係者らは「業界は危機的状況にある」と声明を発表した。

ロイヤル・バレエ学校が若年層の趣味のバレエ学習者に向けて、新たな評価プログラムを設立した。

北米

ニューヨーク・シティ・バレエ団は新型コロナウイルスの影響で冬シーズンの開始を延期することを決定した。感染者が増え、12月後半に2週間ほどリハーサルをすることができなかったためだ。

ジョフリー・バレエがオミクロン株による新規感染者急増を受けて、2月に予定されていた公演を6月に延期した。

バレエにおけるジェンダー格差を、データを用いて調査した結果が発表された。調査結果によれば米国にある50のバレエ団では、芸術監督の約7割が男性だった。

その他の地域

1月6日と9日にドバイとアブダビでそれぞれ予定されていた「ロベルト・ボッレと仲間たち」ガラ公演は、出国前の検査で関係者から陽性反応が検出され、関係者が出国できなかったため、延期された。